



史料室だより
第4号
1982・10・10

II 特集・深江の歴史

編集 田辺 真人
発行 神戸・深江会館
電話 神戸市垂水区深江本町3-1517

生活文化史料室

身近かな歴史の博物館

—中央アジアの夏の旅から—

県立師影高校歴史室長 田辺 真人

数年前にイラン・イラク・レバノンなど西アジアを訪ねた私は、今夏は中央アジア——シルクロードの中央部に栄えた古都ヒワやアラハラ、アレクサンド

ロス大王もその美しさを讃えたサマルカンドなどを訪ねた。アム河につかり、カラムク砂漠に寝そべる長閑な旅であったが、その途中の、かつて千年も前

に通商海使の人々がやつたように日本海を横断して、教員からナホトカまで船で渡り、そこからシベリア鉄道でハバロフスクに向うというおまけも魅力的だ

った。ハバロフスクからは空路でタシケントに到り、中央アジアを旅したわけである。

多くの史跡を訪ねる一方、各地で博物館を見学し、地域の歴史の展示についても見聞することが多かった。アラル海の近くの集団農場では、文化部の建物の一間に三つの展示室をもつ“博物館”があり、古い農具や機械昔の農家の部屋の復元、第二次大戦の戦没者の写真などが、手づくりの展示ケースに並べられており、農場員が胸を張って“私たちの歴史です”と説明してくれたのは印象的だった。

サマルカンド東方七〇。山間の町ベンジケントの郷土誌博物館では、郷土出身の詩人に関する展示や考古資料にまじって、古い縫つむぎのザクリ器が私の眼を奪った。それは深江の史料室のものに酷似しており、数千。離れた砂漠の民と、我々が一緒にいたと痛感したのである。

各地で古い寺院や旧王宮の広間が、史料の展示や小学生の作品展示に使われており、人々は愛着をもつて博物館と呼んでいた。



サマルカンドのシルドル回教寺院



KHABAROVSK MUSEUM OF REGIONAL STUDIES

ハバロフスク郷土誌博物館

特に印象深かったのは、ハバロフスクの郷土誌博物館で、土壤・植物・動物など自然風土の展示から、先史時代の土器・石器・少數民族の生活やロシアの開拓民の小屋など興味深い展示室が、棟瓦造り三階建ての古色を帯びた堂々たる建物の中に納まっている。この博物館でも誇張されたような革命と革命後の展示には、多分に政治宣伝のにおいがしたが、見学した多くの博物館で、地域の歴史が大切にされていることを痛感した。ハバロフスクでは館長にお会いすることができ、多忙の中を三〇分の時間をきて下さり、その地方の調査の様子などについていろいろ話しながらることができた。今後の印刷物の交換が出来れば、など約束することもできた。

深江の史料室もいよいよ増築案が具体化しつつある。かなりの規模になる予定だが、私は一つの夢をもっている。オーストラリアやアメリカなど、太平洋を囲む各地の地方史博物館と交流したいと思ってる。このような市民としての文化交流こそ、港都、神戸の一画、海に開けた深江の地方史博物館の、未来の大きな可能性だと思う。

ふるさと深江の歴史

長田
岡辺
暁眞
子人

深江の弥生時代

人間は、大むかし山や海にいる動物や、野原には
えている草などをとって、それを食料にして生活し
ていました。けれども、そのような生活では住んで
いる土地のまわりに食べることのできる動物などが
いなくなると、住む場所を変わらなければならず、
とても不便でした。

の法を行ないます。この時、人々に同じ広きの田を与えるためには、田を一定の広さことに分けておかねばなりません。このため田を井戸型の目のよう(きぼう)にきちんと区切つたものを条里制(じょうりせい)といいます。深江駅の西側に流れている高橋川(たかはしがわ)が阪神電車の北で北むきかへ、さらに四百メートルほど西でふたたび北むきへ流れを変えているのはこの条里制の影響だと思われます。

踊り松の言いつたま

しかし、人間が食物を作れば、食物がなくなると
いうこともなく、いつまでも同じ場所に住むことができます。
このように、田畠での作物づくりが可行な
われるようになったのは、今から二千年ぐらい前で、

その時代を弥生時代といいます。この近くでは森丘町でその頃使われていた土器（ねんどで形づくり、焼いて作った容器）や石器（石で作られた道具）が見つかっています。また本庄小学校の校庭からは、石斧（石でできたおのみたいなもので、物を切ったり、けずつたり、土を掘るのに使う）や土器が出てきて、この土地で生活していた人々のくらしのよう

最初は家族ぐらゐの少人数の人が集まつてくらいたいのですが、この集まりはしだいに大きくなつて、やがて国ができあがります。奈良時代になると決まつた広さの田を人々に与えて作物を作らせ、その作物の一部を国に税としておきめさせる班田收授



天保七年の摂津国名所旧跡細見大絵図

りをおどりまわって神をむかえ入れて、神さまが住むための社を作りました。これが深江の北にある森の福荷神社のはじまりだということです。そして神さまが流れいた松は、その時から踊り松とよばれるようになりました。

また、このような言いつたえもあります。ある時ひどい大雨がふつて森の福荷神社も流されてしましました。その時、神さまがこの松の下に流れついていらっしゃったので、人々はよろこんで松のまわりをおどりまわって神さまを森につれて帰りました。

そのためこの松を踊り松というようになつたのだとあります。今から五十年ほど前までは、森福荷のとにかく、今から五十年ほど前までは、森福荷のおまつりの時には深江本町四丁目につづく踊り松のところまでお神輿がくり出していました。

深江村のはじまり



明治末期の踊り松

室町時代の文明年間（一四六九—一四八七）に薬王寺の住職（お寺の主人）であった觀空は、淨土真宗を信ずる本願寺のお坊さんであった蓮如をしても尊敬しており、寺の信する宗教を淨土真宗にあらためて寺の名を延寿寺とし、信仰する仏さまを阿弥陀如来に変えてしまいました。

その後、寛永十年（一六三三）に永井二左衛門が仏の道に入つて修業をするために出家し、空照と名のつてこの寺の住職となつた時、寺の名をまた変えたと伝えられています。

さて、前にお寺で信仰されていた仏さまである大日如来は観空によつて寺から出されてしまつたのですが、この仏さまはやがて村人にひきとられて、深江村の守り神として祭られました。これが今の隣神

た。この寺のまわりの家々と、その東に住んでいた有力者、永井氏の屋しきのまわりの村がいつしょになつて、戦国時代（一四七七—一五七三）に一つの村ができました。この地は芦屋川の西につづく低地であり、その海そいは入りこんだ入江となつてゐたため、それにちなんで深江村とよばれるようになつたということです。

元和元年（一六一五）の大坂夏の陣という戦いで豊臣氏が敗れると、豊臣氏が持つてゐたこの土地は、江戸幕府のものとなり、さらに元和三年には尼崎藩（今は日本の国がいくつかの県に分かれているが、江戸戸時は政府にあたるのが幕府で、地方は藩に治められていた）の土地に加えられました。尼崎藩の藩主（藩の中でいちばん高い地位にあつて、藩を支配する人）は元和三年の時は戸田氏でしたが、寛永十一年（一六三五）に青山氏へ、寛永八年（一七一）には桜井氏へと代わつて、いきます。

江戸時代に深江村は農業と漁業が盛んに行なわれていました。村人たちは、春は田におりて穀を育てて米をつくり、秋には山へ登つていくという山の神さまや、魚がたくさんとれることを約束してくれるあります。

このような農村の中を、今の国道二号線の近くに松並木が続いていました。それが、諸國の大名が江戸（今の大東京）へ参勤交代（大名が一年おきに江戸に住むこと）に出かける時に通つた西国街道です。街道の道ばたには、脚影では一里塚（街道に一里、

深江駅のすぐ南東にある大日靈女神社のおこりだといふことです。明治元年（一八六八）に神さまと仏さまを別に祭ることが決められたために、たぶんもとは大日如来を信仰する薬王寺を守るための神社だったものが別れて村の守り神となつたのでしょう。

江戸時代のようす

元和元年（一六一五）の大坂夏の陣という戦いで豊臣氏が敗れると、豊臣氏が持つてゐたこの土地は、江戸幕府のものとなり、さらに元和三年には尼崎藩（今は日本の国がいくつかの県に分かれているが、江戸戸時は政府にあたるのが幕府で、地方は藩に治められていた）の土地に加えられました。尼崎藩の藩主（藩の中でいちばん高い地位にあつて、藩を支配する人）は元和三年の時は戸田氏でしたが、寛永十一年（一六三五）に青山氏へ、寛永八年（一七一）には桜井氏へと代わつて、いきます。

江戸時代に深江村は農業と漁業が盛んに行なわれていました。村人たちは、春は田におりて穀を育てて米をつくり、秋には山へ登つていくという山の神さまや、魚がたくさんとれることを約束してくれるあります。

このように農村の中を、今の国道二号線の近くに松並木が続いていました。それが、諸國の大名が江戸（今の大東京）へ参勤交代（大名が一年おきに江戸に住むこと）に出かける時に通つた西国街道です。



正徳3年(1713)の深江住居図

つまり四キロメートルぐらいとて土を少し高くもつた塹を作つて、旗をする人が距離を知ることができるようにしたものが作られ、住吉には茶店もありました。さらに海の方へおりると、だいたい、今のが第二阪神国道にそつて浜街道とよばれる道がにぎわっていました。とくにこの地方は、江戸時代の商業の中心地である京都や大阪に近く、しかも街道のまわりにあるため、江戸時代のはじめころからかなりいろいろな産業が行なわれていました。たとえば、六甲山の中にある流れが急な川を利用した水車（水の力によってまわるようになつてある車）を使う産業がさかんに行なわれ、その水車ははじめは蒸氣の油をしぼり出すために使われていたのですが、あとになつてからは精米（もみを取つただけの



明治18年の深江地方

米をついて白くすること）にも使われました。とともに、魚崎や御影などでは酒造業（酒を作る業）が発達して、そこで作られる酒は天保期（一八三〇—一八四三）になると、伊丹や池田で作られるお酒にかわつて有名になります。また、水車場で米などをつくのに使う白い石は、御影や住吉の山の中から切り出されて各地に売られ、御影石といふ名前で人々に知られるようになりました。この酒や石は御影や魚崎の港からいろいろな地方に送り出され、青木や深江は漁村としてにぎわいました。いっぽうで、明和六年（一七六九）には、深江は青木・中野の一部、西青木・横屋・魚崎・田中・住吉・御影・石屋・東明といつしょに幕府の土地（天領）となり、明治時代をむかえることになります。

明治時代になつて

江戸幕府にかわつて天皇を中心とした中央集権的な明治時代がはじまります。明治元年（一八六八）五月には深江のまわりの天領は兵庫県となり、尼崎藩に入つた村々は明治四年七月に尼崎縣とあらためられます。さらに同じ年の十一月になると尼崎縣は兵庫縣の一部となります。明治十一年には兵庫縣の中にひとつの区と三十三の郡が作られ、深江はその中の葛原郡にふくまれます。やがて明治二十二年にになると東灘の地域に次にあげる五つの町や村ができるます。

- 本庄村：深江・青木・西青木
- 住吉村：住吉だけ
- 魚崎村：魚崎・横屋
- 御影町：御影・東明・石屋
- 本山村：森・中野・小路・北畠・田辺・田中・開本・野奇

この間に、明治七年には大阪と神戸の間に鉄道が通り、住吉に駅が置かれ、明治二十一年になって今東海道本線がすべてできあがりました。さらに明治三十八年に阪神電車、大正九年（一九二〇）には阪急電車、そして昭和二年（一九二七）の阪神国道電車とつぎつぎに電車が動きはじめます。これによつてこの地方は大阪市や神戸市とますます深いつながりを持つようになりました。このような変化もあって農村の人口はだんだん増加し、江戸時代からはじめた産業もどんどん成長して沿辺には少しづつ工場が建つようになり、住吉や御影は住宅地となり



大正初期の深江浜



深江南町4丁目の70年後の現在。上と同じアングル。ジョン台風(昭和25年)後、旧海岸線に築かれた防潮堤(中央)をこえて、右側には昭和45年の埋め立て地がのびている。

今この深江は、このようないい状態からたちなおつてできた新しい町です。しかしそれにもかかわらず、町のいろいろな所に長い年月の間に作り出された歴史が残っています。そんな歴史や、人々が生きていくうえで使われた道具などをなくならないように集め、見学のための部屋を作りました。それが「神戸深江会館・生活文化史料室」です。みなさんのご両親やおじいさん、おばあさんが子供だったころ使っていたらしやつた食器、おもちゃ、教科書や、昔の戦争に使われた鉄砲や洋服、さらに明治時代ごろにお医者さんが使っていた道具など、今の生活からはとても考えられないようなおもしろい物がたくさんあります。教科書などには書かれていませんが、そのまわりの歴史や興味のある人は、気がするところをお聞かせください。

しかししながらこのように発展する一方ぼうでは、その発展をさえぎるようなできごとも起っています。昭和十三年の阪神・大水害では、住吉川や石屋川の水があふれてまわりの町々を水びたしにしてしまいました。また第二次世界大戦中の昭和二十年五月十一日の空襲(たくさんの爆弾を落とされること)は東灘のほとんど全部を焼きつくしました。この空襲は青木の浜にあった飛行機工場をこわすために行なわれたもので、工場には二七〇発、となりの商店街には三〇発の爆弾が落とされ、死んだ人は二一〇三人、けがをした人は八二四人にものぼりました。

生活文化史料室

郷土史への関心が高まり、学校教育にも取り入れられようという昨今だが、神戸の通史の参考書は意外に入手困難。落合重信先生の名著『神戸の歴史』もすでに絶版で書店で買えない。

そこで、勉強会や自修用のサブノートに、

生活文化史料室は、本書発行を計画。神戸市職員研修所と市の健康教育公社の大きな協力を頂いて公刊が実現し、ジュンク堂、海文堂、白鶴書房、すま書房、丸など有名店で発売中。

好評『神戸の歴史ノート』

掲示板

「神戸の歴史ノート」発刊



郷土学者のサブノート(補助教材)「神戸の歴史ノート」が、神戸深江会館生活文化史料室から発行されました。編者は田辺真人教授で、講義は神戸あるいは高校で卒業から指導要項にはいたった「地域社会の歴史と文化」で歴史の大筋をつかむため、時代別に整理したもの。この一冊で神戸の歴史の流れをつかめると評んでいます。週刊誌

大二〇円、三百円。神戸市東

神戸新聞朝刊から
昭和57年8月13日(金)

審長の田辺真人さん（県立福井高教諭）も「士、日頃なげなのに、これだけ来るとは…」と初めのうちは喜びられない面持ち。だが、いろいろべつが勝ちないばかりか、小学生からお年寄りまで頭も広がり人教も目に見えるふれてる。

一方、友の会も現在百七十人。徳の酒蔵と周辺の史跡巡説、一ヶ月でバスによる市内歴史ツアーワークshopなど、徳の酒蔵が、毎年、新しく企画を広げています。これまで歴史とは疎うすかでいた人々が、新しい学問だと思いつぶやいた人々

率、小さな研修室を…と三種類ある
で、スペースも五倍の「生活文化セ
ンター」にして、という。

区役江本町三丁目
生活文化の歩みを跡づける展示室
田辺彌藏(中央)の顔も貼り丁寧だといいですねと柳川市蔵書

日曜
焦点

神戸・深江会館生活文化史料室

好
評
三
民
俗
博
物
館

民俗博物館。が神戸市東灘区医師江本町三丁自五ノ六にオーブンして一年半。見学者名簿に記載した人だけでもすでに千、七百人を超えた。この「生活文化オーブン」を営む者は、深江府営区管理会（太田垣理）である。

人食、伊からぬ帝廟はけむな
く続成、今では能原時郎の御子
書をこれほど多く文教、
書をいたるもののが御成た
から、小物、べてを数に算て數
倍になるがゆう。
されど、おまかせ、御用會の入
り口、おまかせ、御用會の入り口

卷之三

卷之三

神
經
學
文
化
史
半
世

卷之三

王氏博物館

好評

- 6 -



「へえー、うまいこと考えたなあ」。木製水筒に昔の生活と知恵をしげる小学生

化が来年度から一つの柱になります。児童の歴史を重視しよう、ということですが、児童たちも自分の生活文化の流れを覚えて語りを育てられたので、ここ歴史の教育は、もうと頼なれます」
まざしく八幡の盛り上がりを熱く語ったような動きである。

暮らしの歴史に興味

見慣れないはずの漆器
器にちりばめられた時代の流れがまさか
春の花咲く中の文化財といつづれ

入会のおすすめ

神戸史学会

(代表 落合重信)

機関誌『歴史と神戸』(隔月刊)

会費・年額 2,000 円 (1~12月分前納)

〒653 神戸市長田区川西通3丁目8

太陽印刷内 ☎ (078) 691-2085

振替口座 神戸4018



井上郷土玩具館

(館長 井上重義)

10時~17時 毎週水曜休館

(祝日は開館・翌日休館)

姫路駅から~国鉄播但線で23分の香呂駅下車
東へ徒歩10分。

〒697-21 兵庫県神崎郡香寺町中仁野671-3

☎ (07933) 2-4388

神戸華僑

歴史博物館

(館長 陳 徳仁)

9時~17時 (年中無休)

大人 300円 学生 200円 (10人以上団体割引有)

国鉄元町駅 西口から南へ5分の海岸通角

〒650 神戸市中央区海岸通3丁目東南角

K C C ビル2階 ☎ (078) 331-1277

楽しかった野外映画のつどい

佐野末夫

七月二十五日夜

「パパ、あのバビリオンへ入ったな？」

「こっちのバビリオンも行ったやろ」

親子の楽しい会話を耳にし、前日の長崎豪雨に心

いためながら、「ポートビア'81」の記録映画を見た。

七月二十五日、例年なら真夏の暑い日のはずだが、ウチワも使うことのない雨のやみ間（大日神社で野外映画の集いを開くので、天の神がじや口をおさえてくれたのかも……）、一五〇名以上の大人と子どもが、生活文化史料室の先生やお兄ちゃんがア



1982. 8. 29(日) 神戸港めぐり船の旅
神戸の夜景を見ながら歴史を語ろうと、
200人あまりの人々が参加した。

ログラムを組んでくれた「野外映画の集い」を楽しんだ。昔ばなしのマンガ「カチカチ山」「花のき村とぬすびとたち」や「ポートビア'81」の記録映画を見ながら、昨年の今頃は……と、ポートビアに思いをはせた人たちばかり。

子どもたちにとっても、夏休みの日記に書き加えられた楽しい一日であったことと思う。平素はテレビの前に座りこむ子どもたちに、野外のすばらしき教える場として、これからもよいプログラムをつくっていただきたいと願つてやみません。

友の会・新入会の方々（敬称略）

岡本 真一 小堀 次熙 藤木 章子
野田 正蔵 志賀 貞子 田部 美知雄
生駒 育子 大田 みづえ 沢井 聰子
山口 房子 小網 素い 望月 浩

新人会十二名（会員合計百八十五名）

友の会会員募集中

年間会費千円を前納して下さい。史料室の催し案内や、郷土の歴史の本を届けます。たのしく歴史を学ぶリッチな行事に参加できますよ。お問い合わせは史料室員まで。

郵便振替 神戸三二一四四〇八灘江会館史料室友の会

編者から――

史料室の二年度は残りわずかですが、読者は元気な勢

西宮市教育委員会

神戸市役所

東灘区役所

協力団体

神戸市立歴史博物館

神戸市立森林植物園

サンテレビ

明石市立天文科学館

神戸華僑历史博物館

神戸市立博物館

武庫川女子大学

国立神戸美術館

井上郷土民俗館

御影高校地歴部

かがでしな/友の会会員数は奇

妙なことに、ずつと見学者の一割

というペースで増加して、約百

名の大所帯、歴史身近なものと

して感じて頂こうと企画される幹

事さんも大手ですが、今年も八月

の船の旅・十月屋街道を歩く会

など多彩な催してゐた（八月に史料室から発行した「神戸の歴史ノート」は、マスク関係の方やい

シフォーメーション・神戸・市内の有名書店との協力で、予想を越えて

好評、どうかがいよいよを出

きねばならないと思いまつき

史料室だより第四回、灘江の地域

史を小学生君と読んでもらえ

るよう、作りました／といよい

よ挙げると、いよいよ押されて、

史料室講習会を具現化しようと

していきます。灘江の歴史と

生活文化のゆみを学べる、一層立

派な郷土の歴史博物館の完成のた

めに、お智恵と力をお願いしま

す／今秋の神戸市立博物館、米菴

の島立歴史博物館、兵庫県にす

ばらしい施設がオープンしますが、

わが街の二度目博物館もよい

個性を發揮して成長です（真）

楠木 春雄

門前 寛子

大川 弘

佐原 浩平

清水 久雄

田辺謙

調査員 理事会 員会員
伊東 玲子 志井 道雄
小野 仁和子 岡田 龍太郎
北島 まよ子 志井 保治
谷口 登里 岩崎 英樹
長岡 瞳子 永井 真治
三浦 文子 天田 畏司
尾崎 京子 佐藤 望
金原 浩子 藤田 美里
嶋崎 喜英 門前 康喜
寺岡 一夫 植木 繁紀
渡部 永子 以上當任
結城 正福

- 8 -